

が掘り下げられ、宮守坂が通じ、濠が埋めたてられるなど、かなり大きな変容を蒙った。さらに金谷出丸は尾山神社となり、百間堀・白鳥堀も道路となり、庭園は埋め立てられ、金沢市の近代都市としての発展に伴ない、城の周辺もまた面目を一新することになった。

終戦後、この軍事施設は米軍の管理下に荒廃していったが、新制金沢大学の発足とともにその校地となり、兵舎は改装され、やがて鉄筋コンクリートの新校舎が輪奐の美を競うことになった。すなわち新丸には理学部と教養部が、三の丸には本部と学生会館、ここから鶴の丸にかけて教育学部の校舎が建てられた。二の丸跡には法文学部と中央図書館および職員会館が建てられ、本丸付段の新装なった三十間長屋の前には植物園管理事務所が建てられ、本丸と東の丸すなわち御山（尾山）の頂上は植物園として利用されている。また玉泉院丸は大学の手を離れて県有地となり、石川県体育館がここに建設せられた。



2. 極楽橋のたもと、中央が鎮台分営の建物の赤煉瓦積の土台

このように近代的土木機械を駆使し、地下数メートルを掘り下げて、巨大な建造物が構築されてくると、陸軍省管轄の時期と全く異なった形で、金沢城の地下ならびに地上の遺構は危機にさらされるにいたった。工事の行なわれた地点では、近世前期のものと見られる古瓦が散乱し、豪壮な城郭建築を偲ばせる巨大な礎石が掘り起され、青磁をはじめ近世を通じての伊万里・瀬戸・越前などの陶磁片が、いたるところの地表面で採集される状況になった。



3. 三十間長屋（本丸付段）

勿論、第9師団当時でも、城跡の保存に配慮がなかったわけではない。昭和初期にも師団長の特命で、将校の指揮する1ヶ小隊の兵士が城跡の環境整備に尽力したことがあり、極楽橋上手の石階段や本丸石垣には、明らかに軍隊の行なった補修の痕が認められる。しかも当時の工事能力では、遺構の上に地盛りをしつつ、簡単な基礎工事がなされたにすぎず、この広大にして豪壮な城郭遺構を決定的に破壊するにはいたらず、明治14年の火災で焼失を免かれた石川門や三十間長屋も、そのまま利用されて現在にいたっている。さらに金沢城、第9師団の時期を通じて、ここが自由に庶民の出入できる場所ではなく、居住者は城内の動植物にさしたる興味を示さなかったためであろうか、すでに開発され尽した金沢市内外で見られなくなった植物が繁茂し、動物が棲息しているといわれる。

しかし金沢大学の各施設の新築は、急速に城内の自然および史跡の変容を余儀なくさせることになった。そこで法文学部 野間三郎（地理学）・教育学部 若林喜三郎（国史学）・工学部 喜内 敏（構造力学）等諸教授の肝入りで金沢城學術調査委員会が組織され、昭和41年度から全学的規模で活動を開始することになった。調査の対象は、地形・歴史・構築物・地質・動物・植物・城絵図など諸般に及び、既得の資料をもとにして昭和42年「金沢城」と題する冊子を公刊

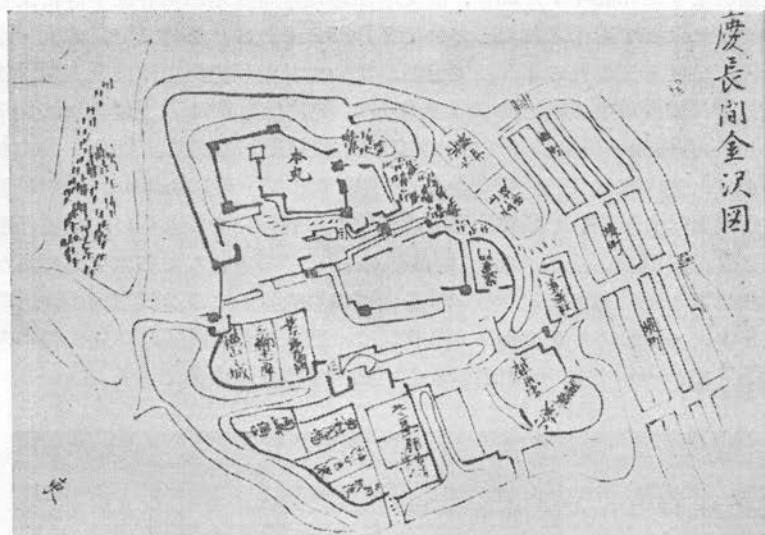
した。小冊子ではあるが、古地図を集めて比較検討し、金沢城の縄張りと建造物の平面図を作成された野間教授の仕事と、喜内教授の龐大な金沢城関係資料の収集と構築物の研究、ならびに「金沢城資料目録」とともに、金沢城址の研究の推進に大きな役割を果たすものといえる。

こうした基礎的作業の上に立って、金沢城学術調査委員会は、昭和43年度から、城内各所において発掘調査を実施し、文献の示すところを遺跡と遺物の面について確認することとした。ここにその第1次調査の概要を記し、次年度以降の調査の参考にしたいと考える次第である。

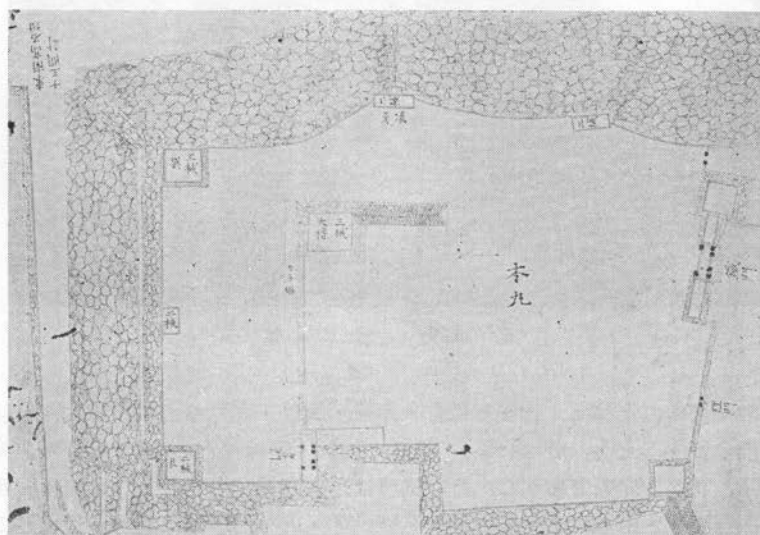
1 発掘の過程

金沢城の地下における遺構がどの程度に遺されているかは、久しきにわたる問題点であった。藩政期の数次にわたる建造物の炎上とその焼跡整理、第9師団の兵舎建築の基礎工事、排水管の敷設などによって、かなり破壊されていると考える方が、むしろ常識的見解であったかも知れない。とくに軍隊による弾薬庫の構築は、本丸の主要部分を深く掘りくぼめたために、初期の金沢城の復原はほとんど絶望に近いとさえ思われた。従って発掘作業の第一段階としては、まず果して遺構が存在するかどうか、存在するとすればどのような地下層序を示しているか、という点について試掘を行なって見る必要がある。そこで本丸では三十間長屋跡と天守台（三階御櫓）の基礎を、二の丸では御殿跡、三の丸では「慶長古図」の示す三輪・長・横山の三家老屋敷跡と九十間長屋を、それぞれ検索の目標として選んだ。そしてできれば金沢御坊に關係する中世の建造物址を発見したいというのが望蜀の望みであった。

また金沢城絵図は各種あって、多くは藩政後期に作られたものらしく、大綱においては一致するが、製作年代の相違するためか、建造物にも異同がある。また本丸天守台のように半ば伝説化した建造物は、どの絵図にも記載されている。そこでは一度虚構の絵図が作成されると、転写を重ねるにつれて、実在したような印象づけがなされる傾向があり、発掘の成果によって、地図に対する文献批判を行なうことが必要になってくる。そこで数多の金沢城古図のうち、比較的年代のはっきりしているとみたかかげちか富田景周（享保17～文化11）の筆写にかかる金沢城図をもとにして、文化5年の火災以前の遺構を確かめ、さらに絵図に現わされていない近世初期の建造物址を探る方法を採用したのである。

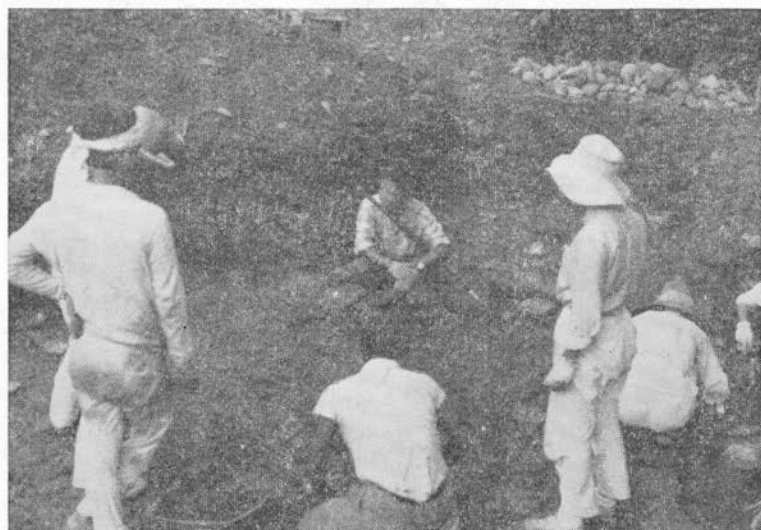


4. 慶長間金沢図(写) (京都大学保管)



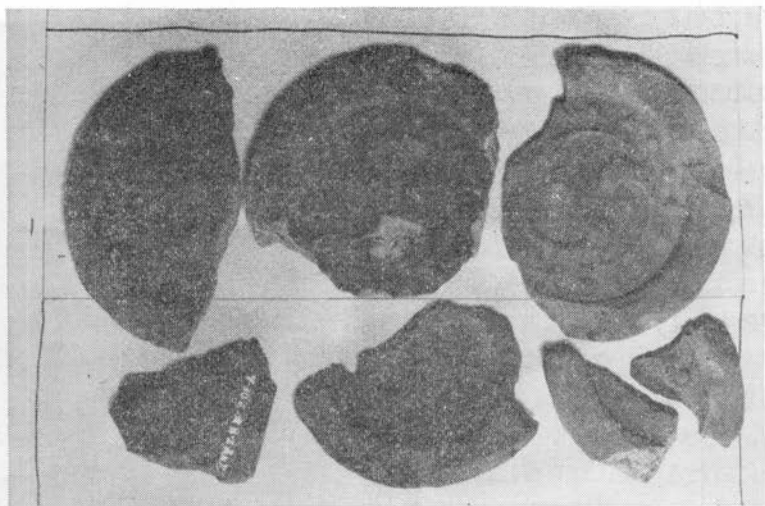
5. 富田景周筆 金沢城本丸図 (石川県立図書館蔵)

発掘はまず昭和43年7月20日、法文学部地理学研究室の浜谷助手等による本丸の測量によって着手された。ついで7月23日より8月2日まで、本丸・本丸付段・二の丸・三の丸の4ヶ所で発掘が実施された。発掘主体は金沢城学術調査委員会（委員長中川善之助 金沢大学長）、発掘担当者は井上鋭夫（法文学部教授）・吉岡康暢・橋本澄夫（石川県立郷土資料館）である。発掘に協力された方々は、金山顕光（松任農高教諭）・浅香年木（石川工専講師）、大三輪龍彦（学習院大学大学院）と桜井伸君等学習院大学輔仁会史学部員11名、松任農高地歴クラブ員10名、金沢大学学生43名の諸氏である。なおこの発掘にあたって、北日本観光自動車株式会社（社長山岡東吾氏）および金沢市内の金沢東・兼六・中央・金沢の4ライオンズクラブは、発掘用器材購入ならびに報告書作成費として金一封を寄せられた。記して謝意を表する次第である。

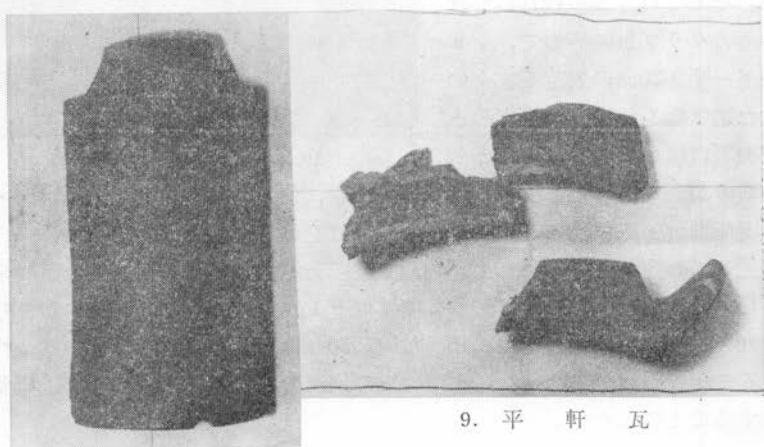


6. 本丸の発掘風景

この発掘の出土品は、青磁・染付・赤絵・天目・瀬戸などの陶磁片、越前・備前焼の甕片、土器、釘（鉄・銅）・煙管・鉛板・銅線などの金属類、平瓦・筒瓦・軒瓦、ガラス片等であった。その整理は稲生高子・堀君江・加藤陽世・西節子・西野康代・山本信子・室谷伸子・室山孝・三村信・藤田耀也・徳永健二等の史学科及び考古クラブの学生があたり、量的には整理箱20個分を超えた。



7. 丸 軒 瓦



8. 筒 瓦

9. 平 軒 瓦

ついで10月の休暇に入ると、考古クラブ員10名とサッカー部員約10名および土木工学科の学生5名の諸君によって、10月8日から15日にいたる間、本丸・三の丸の埋め戻しと、二の丸の発掘が行なわれた。これによって二の丸御殿は深いところで30cm、浅いところでは15cm掘り下げたところに遺跡がほぼ完全に

遺されていることが認められた。

やがて鶴の丸から二の丸にかけての道路工事が始まり、金沢城絵図によれば、建造物のなかったはずの鶴の丸から、巨大な礎石が出土した。本丸に御殿のあったころの建造物の跡と見られる。城内の石垣のなかでは、本丸と東丸のものが最も古く、初期金沢城は本丸を中心に構成されていたのであろう。また二の丸御殿址は、幹線道路と、中央図書館および法文学部校舎にいたる道路、ならびに排水管敷設のために、2千数百㎡の面積が調査不能の状態に陥ることになる。そこで11月から12月にかけて、考古クラブ員の努力で、ショベルドーザが20cmの表土をすくいとった道路敷を、験土杖をさし込んで礎石の検出にあたることとし



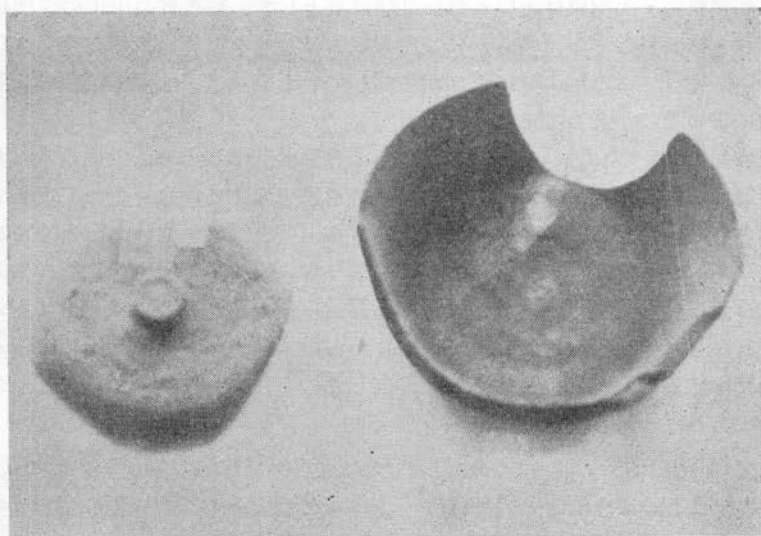
10. 奥能舞台拝見所の礎石

た。この調査では14個の礎石と、石樋2ヶ所、便所2ヶ所を発見し、台所・膳所・奥能舞台・滝ノ間・矢天井の間等の位置を確認することができた。

以上3つの時期に行なわれた昭和43年度の発掘調査では、50万円の予算を使い果してなお不足を生じたが、本丸では地下1mに近世初頭の構造物があり、二の丸・三の丸では、わずかに15cmないし30cmのところ江戸中期の建造物址があることが明らかになった。次にはその個々の問題点を取り上げて、概要を報告することにしたい。

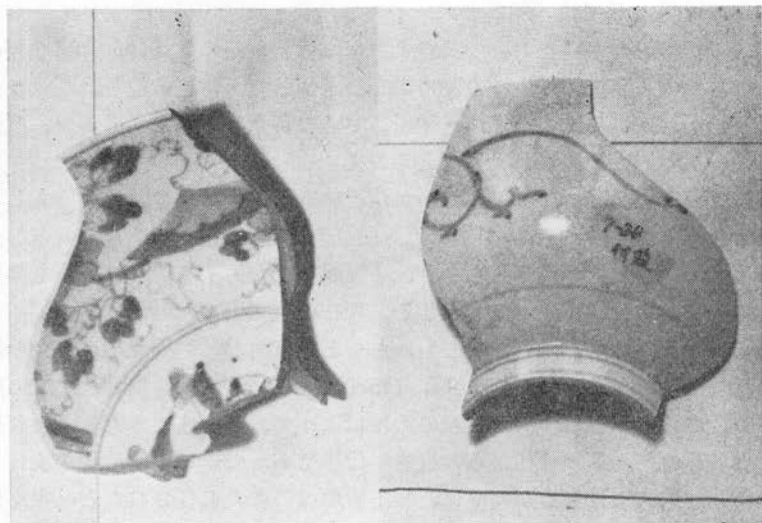
2 金 沢 御 坊

金沢城下の大槻伝蔵屋敷跡と伝える第四高等学校敷地から、平安初期と見られる須恵器の鉢と盤蓋が出土している。しかし金沢城内からは、舶載された青



11. 四高敷地出土の盤蓋と鉢（平安初期）

金沢大学国史研究室保管



12. 染付の鉢（本丸付段）

磁・高麗青磁・大明染付^{そめつけ}といった伝世品は別として、須恵質の中世の珠洲焼・古瀬戸・柿天目などの、明らかに室町以前と認むべき遺物は、まだ発見されていない。従ってこの尾山城に人類が生活していた痕迹は、まず戦国期の金沢御坊址に求めるのが妥当であろう。

「金沢」というのは、「金洗沢」ないし「金掘沢」のことで、中世日本における普遍的信仰形態であった修験道では、金や鉄を産する山は「金山」として神聖視されていたから、この小高い丘陵は「御山」と呼ばれていた。とくにここは、日本海から河北潟に入り、浅野川を遡って戸室権現・医王山に登拝する修験の行道の要地であり、つとに聖地であり、御山であったことは十分に考えられねばならない。若松坊の叛乱を鎮定した石山本願寺が、その北国の末寺・門徒を統轄する御坊（別院）をここに建立したのも、あえて異とするに足りないことであろう。

天文14年（1545）、「^{（御 堂）}みだうたてられ候。於石河郡惣國中ふしん^{（普 請）}兩度樽^{（観 音）}出候」（菊大路文書）とあるように、金沢御坊は、本願寺分国である加賀一国の合力で建立された。翌年10月29日、本願寺宗主証如が、「加州金沢坊舎へ本尊木仏・開山御影大幅也・御伝・泥仏名号賛書之・実如影差下之。三具足其他仏器・燈台以下悉道具共下之。為堂衆、広濟寺・慶信差下之。此次番衆下之」（「天文日記」）と記し、12月9日には「加州金沢一字へ七高僧・皇太子」（「天文日記」）が下されて、御坊の寺観が整った。つまり金沢における御堂の建築は、ほぼ2年の歳月を要した大工事であり、この間に山をひき崩して平地を造成し、壮大な御堂や、御坊を構成する役者の宿所・詰所、さらに番衆の屯所である番屋、門徒・寺院の他屋などが造築されたと考えられる。

この金沢御坊がどこに位置していたかということは、藩政時代から久しく問題とされたところである。「山崎本源寺」と伝えられたところから、もとの山崎町（出羽町付近）と考える人もあり、芋掘藤五郎が山芋を洗って砂金を発見した「金洗沢」^{かなあらいさわ}を金城靈沢であるとして、現在の兼六園あたりを御堂の場所とする説もあった。しかし何といっても、もっとも有力な御堂推定地は、金沢城本丸の地であり、金沢御堂が天正8年（1580）佐久間盛政に占拠されてその居館となり、さらに天正11年前田利家の入城によって、そのまま本丸御殿に利用されたというのが、藩政時代からの根強い伝承であった。この建造物が慶長7年（1602）の大火で焼失したために、城主居館は二の丸に移されたと、古くから信ぜられていた。金沢町には、すでに戦国期から後町・南町（「本願寺文書」）という町名があり、山崎・広岡といった近隣の集落から町人（麴屋）^{うしろ}が移り住ん

でいたし、その南町は現在の南町につながると思われる。そこで城の西側の西町は、また御堂の西部の寺内町に淵源すると考えられ、堤町・松原町は、寺内町が堤や松原で限られていたことを示している。松原町は佐久間玄蕃の入城の頃は穢多^{えだ}が居住していたとされ（「金沢古蹟志」巻一）、石川門から蓮池を隔てた兼六園の上り口の紺屋坂は、中世の賤民である紺屋の集住する町はずれであったものであろう。また金谷出丸（尾山神社）は金屋町のあったところで、前田利家入部以前からの金沢町の家柄町人で、元和6年に藩の銀座を命ぜられ、額丹後守の後裔と称した金屋彦四郎の屋敷地があった。そしてこれらの穢多・紺屋・金屋・商人など、中世社会で卑賤視されながらも着実に商工業と都市を発展させ、商業資本を蓄積してきたのが本願寺門徒であったことを考えるとき、金沢御坊の周辺に生じた寺内町としての金沢町の発生を、叙上の町名のなかに読みとることは決して不当なことではない。

さらに金沢で選鉱された金（または鉄）は、この金屋で製錬されたことは確かで、そこにこの町名の起源があるはずであるから、金谷出丸東側のいもり堀より玉泉院丸（西の丸、石川県立スポーツセンター、石川県教育研究所）の泉水を経て、二の丸（法文学部、中央図書館）と本丸付段との間の濠に、金沢の流れを求めることができるのではあるまいか。

また二の丸の城主の居間の前庭にあった塚は、新五郎塚と呼ばれ、金沢坊々官の坪坂新五郎（「天文日記」）の墳墓とされていた。利家入城当時、この塚から人骨が出土したので、世俗はこれを蓮如の骨とし、四十万の善性寺が近くの山頂に葬った。ついで明治14年に二の丸御殿が焼失したとき、軍隊が焼跡整理をしたところ、またまた人骨が出たので、こんどは存如（蓮如の父）の遺骨とされ、西本願寺別院がこれを乞い請けて、廟所を西町の神護寺址に建立した。存如・蓮如の固有名詞はともかく、ここが二の丸の丘陵の西端であるところから、西方浄土に向う中世の墓地であったことは疑いのないところである。

二の丸から本丸に向って濠を渡るところに架けられているのが極楽橋である。死者をここから濠におろして運んだという説明もなされたが、やはり阿弥陀如来のいます御堂が極楽浄土であり、そこにいたる橋という意味に解釈される。この橋のたもとを発掘したところ、地下1 m 20 cmの卯辰山層の鉄分を多分に含有する淡紅色粘土層に密着して、柱穴址が見出された。この地山は御山に始めて人類が構造物を築いた層で、しかも柱穴の底には数箇の根石が敷いてあり、中世の建築様式を示している。あたかも極楽橋のたもとに設営された小屋の址のような印象を受けるものである。

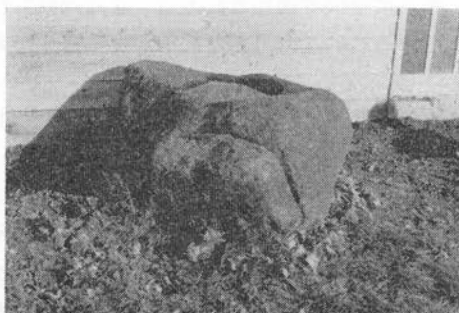


13. 極楽橋たもとの柱穴址

さらに極楽橋を渡ったところには、藩政時代から石段が築かれており、これを登り切った平地（本丸付段）に手洗石^{ちようすいし}という巨石がある。利家入城の頃は2箇あったが、1つは薪の丸の石垣にはめこまれたと伝えられる。手洗鉢用の石が2つ本丸付段にあるのも不可解であるし、その形状も手洗用には不向きであって、中央部を丸くくりぬいたところは、巨大な柱の礎石

として用いられたようにも見られる。もちろん国分寺や太宰府などの礎石とは形状を異にするが、真宗寺院建築が、根石を敷いた上に掘立式に柱を立てた道場の進化したものであることを思えば、この二箇の手洗石は、御堂の内陣の本尊の両側に建てられた巨柱の礎石と見ることはできないであろうか。

本丸付段から本丸の石垣にさしかかろうとするところで、焼土の下の卯辰山層は急に本丸に向かって高くなっている。また本丸には戦前から越前大谷産の石で作られた層塔の塔身が塚の上に安置されている。その一面は剥落し、他の相対する二面には月輪と種字（阿字）^{がつりん}が刻まれている。月輪より見て、これは鎌倉時代の製作と見られるが、のこる一面の半肉彫の阿弥陀如来立像は、蓮如以来本願寺宗主がさかんに末寺・道場に下付した方便法身尊像の輪郭をそのままに



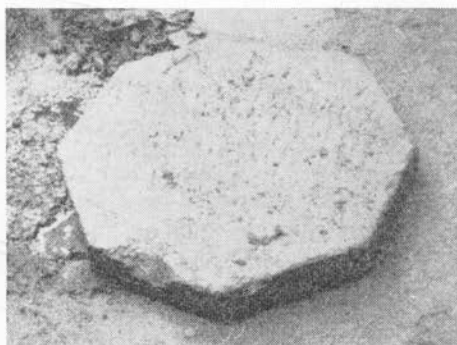
14. 手洗石



15. 層塔の塔身

とどめており、鎌倉期に製作された塔身が、ここに移安されて、金沢御坊の時期に改造せられたことを思わしめるのである。

また材木町河内山卯三郎氏は、金沢御堂の舗石と伝えられる赤戸室とむろの八角形石板を所蔵されている。藩政時代に城に出入りした町人が所有していたもので、近代になって河内山家に秘蔵されるようになったものである。第9師団当時、この石板はまだ城内に保存されていたらしく、これと同種のものが鴻志寮（旧将校集会所）の玄関のところに埋め込まれている。



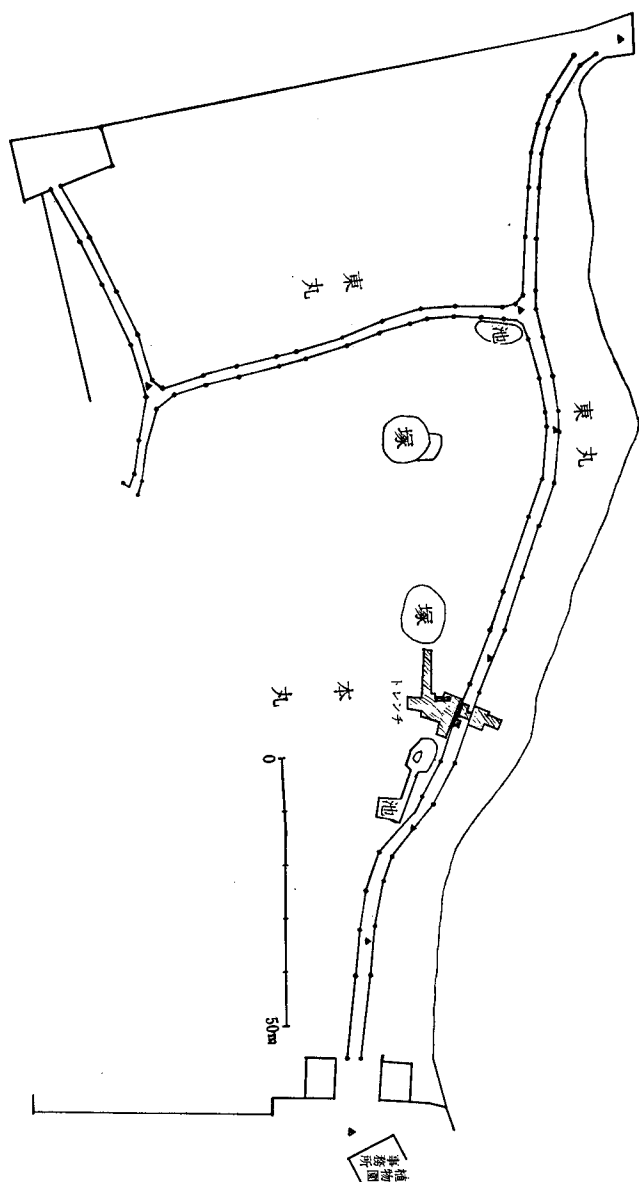
16. 金沢御堂の舗石と伝える赤戸室石

蓋し戸室石が多量に使用されていることは、金沢城の一大特徴であり、この石を引いたところから石引町の名が起ったとされている。しかし戸室権現と御山との関係や、現在本多町にある石浦神社（石浦山王社、長谷観音）を産土神とする城南の石浦郷の存在などから、戸室石は犀川を経て「石浦」に揚陸されたと考えられ、金沢御坊にもそれが使用されていたことは考えられるところである。

要するに、御坊時代の本丸は、御山の山頂をなし、その山崎である付段を平地に直して、ここに御堂を構築したと見るのが妥当なところではあるまいか。そして本丸付段は慶長火災ののち能舞台が置かれたため、寛永8年（1631）にそれが二の丸北端に移されてからは舞台跡と呼ばれ、本丸の度重なる地業の際にも、御堂前の手洗石と堂後の層塔は神聖視されて、地表面に安置されてきたということができよう。

3 三 階 御 櫓

天正8年（1580）4月、佐久間盛政に応じた石川郡瀬領せりょう（金沢市）の村民が、城後小立野から突入したのを契機に、金沢坊は佐久間の本城となった。ところが天正11年、賤しずが岳だけの役で佐久間が敗死したのち、この年の6月、前田利家が金沢に入城することになる。戦国の世の習いとして、ただちに本丸以下、

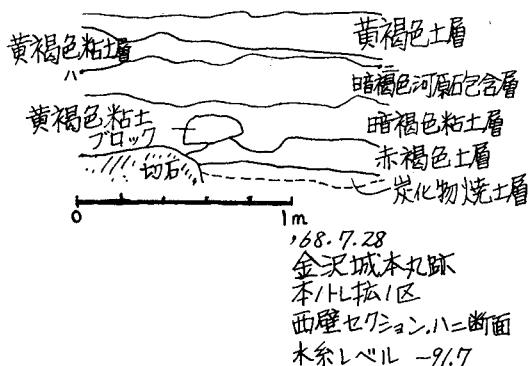


17. 東丸・本丸実測図

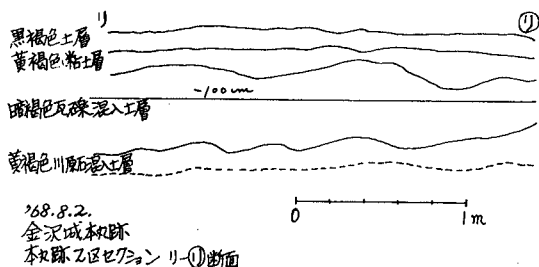
堀を深くし塁を高くして、嚴重な防禦施設が築造されたことは推察に難くない。そしてここ本丸に天守閣がそびえていたというのが、藩政時代の人々の確信していたところであった。

それではこの天守閣は果して幻にすぎないものであろうか。また金沢坊舎を御殿にしたという伝説はどこまで信憑性を持つものであろうか。金沢城絵図がすべて藩政中期以後のものであるだけに、初期城郭は発掘によらざるを得ないのである。本丸発掘の第一目標は、こうした課題に応じて、天守台と伝承された三階櫓台の追跡に置かれることになる。

「三壺聞書」によれば、慶長10年（7年の誤り）お城の天守に落雷して大火となり、煙硝倉が爆発し、火は堂形的場（石川県庁）・桜の馬場（テニスコート）までもなめつくし、金沢城を灰燼に帰せしめた。この火災の直後、前田利長は焼跡からの拾得物をさし出すように布告しているから、焼跡のめばしいものは



18. 本丸トレンチの地下層序



19. 本丸トレンチの地下層序

かなり漁られたようである。さらに焼跡整理も行なわれ、本丸御殿は二の丸に移り、本丸と東丸の境には三十間長屋が建てられ、その東端の天守台の上には三階の隅櫓すみやくらが建てられたという。御殿の二の丸移転は寛永8年かも知れない。

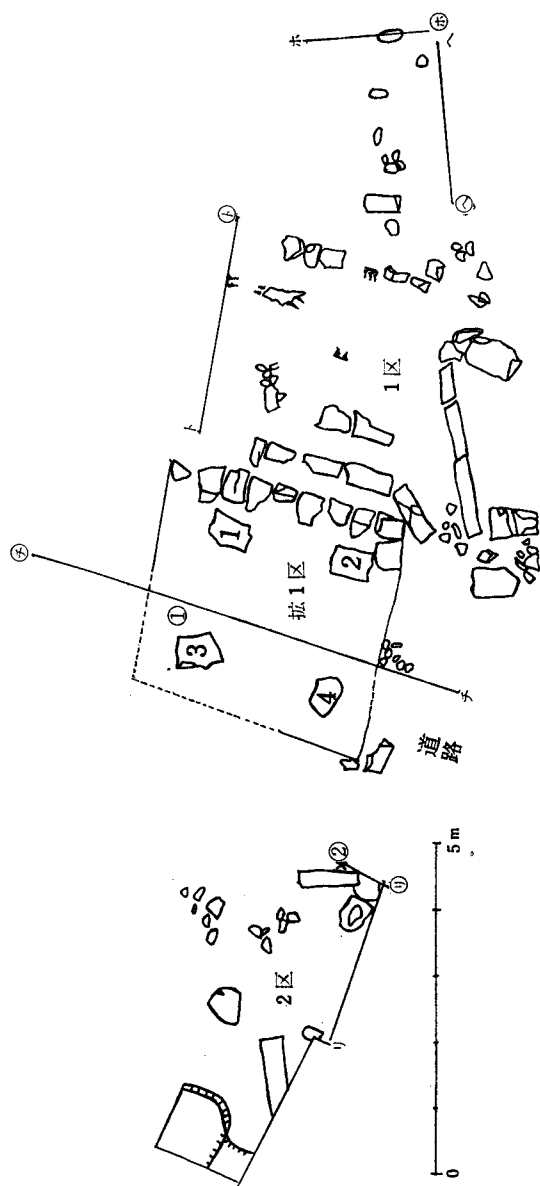
宝暦5年(1755)、藩は幕府の巡見使をこの三階櫓でもてなし、また1階は5間四方、2階は3間四方、3階は2間四方で、1間は6尺5寸と報告されている。従ってこの時まで実在していたことは明白で、恐らくは宝暦9年の大火に焼失したと考えられている。三十間長屋西端の位置にある椎しいの老木が、樹齡2百余年と推定されていることも一つの傍証となろう。金沢城絵図には必ず三階櫓と三十間長屋が画かれているが、絵図のほとんどはこの時期以後に作製されたもので、それらは恐らく伝説に強くのこる性質の建造物であったものであろう。

この点から、まず三十間長屋の礎石を求め、これを東に掘進んで三階櫓台に達するか、または櫓台らしき石積みが三十間長屋と接続しているかどうかを確かめて見る必要がある。まず後者の場合を考えて、本丸中央部の二つの切石に囲まれた塚が櫓台であるかどうかを調査したが、江戸末期の本丸地表面に敷かれた玉石の上に、この二つの塚は築かれていた。つまりこの塚は櫓台の石垣の切石が崩落したのを利用し、明治になってから作られたもので、砲兵が大砲を載せていたものと考えられる。のち正午を告げる時砲に用いられたらしい。他の一つの塚も同様で、ここにはかの方便法身阿弥陀像を彫った層塔の塔身が安置されている。

そこで植物園に池を掘ったときに出土した切石の位置が、申酉櫓台からの距離からすると、三十間長屋の西端にあたと見られたので、図のように鍵形にトレンチを設定し、三十間長屋推定地を直角に横切るように掘って見ることにした。



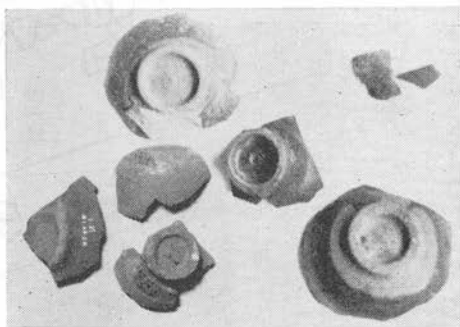
20. 本丸の礎石群



21. 本丸礎石の分布

まず表土を除去すると、焼けた古瓦や、火を被った青磁片などが出土した。これは本丸の一部を掘りくぼめて弾薬庫を築造したとき、残土が本丸に撒布されたためと考えられる。この層の下は、玉石が敷きつめてあり、野田山墓地の利家夫妻の墓を考えると、路面の敷石と見ることができよう。ついで暗褐色の層があり、ここで切石が若干見られたが、これが三十間長屋の礎石であったかも知れない。この層の下に赤褐色の層があり、さらにその下の地下90cmの焼土層で64cm平方の切石が現われた。これには焼灰がべっとり付着しており、大火の跡は明瞭に認められた。

この巨石につづいて周囲から続々と礎石群が現われ、写真および図に見るように、本丸より東丸へはいる門の礎石と考えるべきもので、寺院の門に酷似している。もちろん城郭建築は寺院建築の影響を強く受けているので、この門をただちに金沢御坊の遺跡と即断することはできないし、現実に遺物の面からも、中世の陶磁器は、高麗青磁、青磁のような伝製品を除いては、ほとんど出土しなかった。陶片は天目茶碗や、とくに伊万里と瀬戸が多く、いずれも江戸後期のものであったが、これは陶片が後世に地下に埋められたのを発掘したと思われる。しかるに瓦・水甕などに、慶長期のもので火災にあったと見られるものが多いので、大火の際に、搬出できるものはいちおう運び出されたと考えてさしつかえない。鉛や



22. 天目茶碗

銅や釘の焼けただけたものも見られ、猛火の様子が看取されたが、鉛板片が案外に少なかったのは、火災後蒐集されて、ふたたび鋳直して使用されたことを思わせるし、また屋根瓦が鉛板で被覆されるという金沢城の特色は、かなり初期からのものであるといえる。

このように慶長7年の大火が明らかな事実であるにもかかわらず、三階櫓台（いわゆる天守台）と三十間長屋が依然として把握できないのは、「三州志」の著者富田周周の画いた本丸図の示すように、本丸の三十間長屋が実は10間そこそこのものであったということである。本丸付段に現存する三十間長屋は26間であり、三の丸九十間長屋も28間にすぎない。その間数は、もと30間なり90間であったということである。本丸の門の礎石の西側に、細長い土台石が長屋の

はずれのように配置されているが、これが天守台まで三十間続いていたのであろう。寛永火災ののちは、東丸と本丸との間の防備施設としての長屋はさほど必要ではなく、むしろ三階櫓の付属物としての長屋が建てられたのである。

さらに富田景周の城絵図の年代を求めて見ると、彼の作製した今一つの二の丸御殿の間取図は、二の丸の発掘の結果、礎石の位置といい、便所跡といい、正確に一致している。つまりこれは文化5年の火災ののちに建てられた御殿を示しているのである。しかるに城絵図に記された二の丸御殿はこれより簡素な建造物であるので、文化5年に焼失した二の丸を表現すると見られ、寛永8年以後のものと考えねばならない。従って景周の時代から半世紀前に焼失してしまった三階櫓・三十間長屋については、江戸後期の諸絵図は、存在したという記憶は留め得ても、正確な形状を記すべくもなかったのではあるまいか。

また江戸後期の日用品としての陶磁器片が多く出土するのは、三階櫓焼失のちも、番所・貯用方役所が置かれ、役人が詰めていたためである。かれらの廃棄したものが地下に埋められたのか、発掘された表面にはしじみ貝・かき貝をはじめ、朝鮮製のキセルなどまでが、陶磁器類にまじって散乱していた。

4 水道と二の丸御殿

板屋平四郎が辰巳（金沢市郊外）から犀川の水をひいて上水道を構築したのは寛永年間のことといわれる。この上水道は辰巳用水と呼ばれ、兼六園で分水して霞ヶ池をつくり蓮池堀（百間堀）を渡って城内に導かれたもので、金沢城の死命を制する水の手であった。板屋平四郎も工事完成のとき、秘密を守るために処刑されたと、その過去帳には記されている。この石管は、兼六園・スポーツ・センター（玉泉院丸）・鶴の丸（金沢大学教育学部）の工事の際に多く出土している。

ところでこの水道は、二の丸の極楽橋のたもとで2本が交叉しているように見られるので、この地点を掘ったところ、はじめて木樋を使用している水道址を掘り出すことができた。つまり表土を取り除くと、明治初年の鎮台の建物の土台に用いられた、赤煉瓦を漆喰で固めた構造物がある。この付近から、玉石や戸室石で周囲を固めた水道の上部が現われはじめ、この石を除去すると、木樋が腐ってポツカリと空洞になった、直径10cmばかりの穴が、地下1m40cmのところに2つ見られた。これは明らかに木樋のまわりを粘土で固め、その下に平たい玉石を置いて沈下を防ぎ、周囲を石でかこみ、木と土と石の三者を巧み



23. 水道木樋の跡

に利用した水道管であった。そしてこの下の卯辰山層の粘土に密着して、石が敷いてあるので、これが最古の水道と見られ、寛永年間の板屋平四郎敷設の用水路というものに比定される。

この3本の水道のやや上層に板石を積んだ石樋が、木樋の水道を直角に横切っているのが認められた。蓋石を取りのけると、なかには木樋の腐った泥がつまっていた。材質は栗のようなもので、2本の樋を「シュロ」の皮とひもで固着させ、水ももらさぬようになっている。この2本の木樋が入れてある石樋の部分は幅が広く、ほかの石樋には木樋が1本しか見られないから、この部分の水道は、

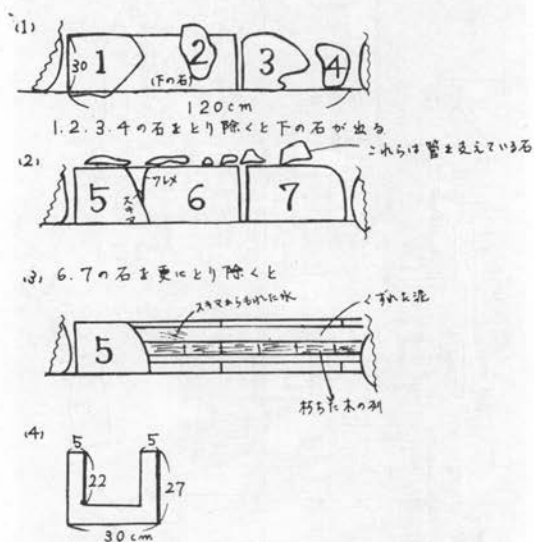
後年になって辰巳用水路の改修が行なわれたとき、ここで分水するために、このような構造が考えだされたといえる。2本のうち1本は約30度上方へ向いており、これが二の丸の台所と御膳所へ水を供給したもので、他の1本が城主の



24. 水道の石管蓋石



25. 水道下の敷石列

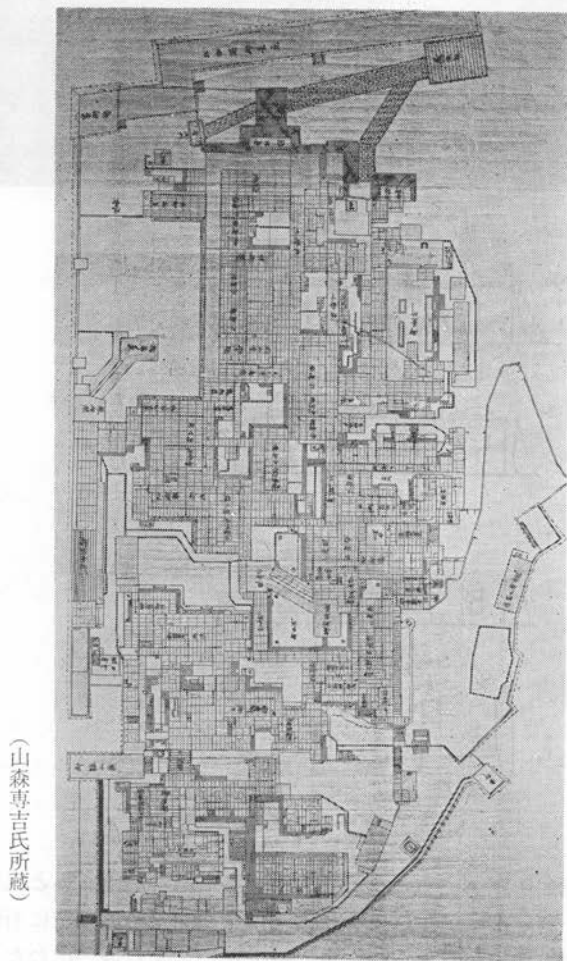


26. 石の位置 (平面図)

居間の前の中庭の泉水へ水を落とし、玉泉院丸を通して堂形へと流れていったものであろう。このように辰巳用水は通常は木樋を用い、要所に石管を用いたもので、延々と城内に石管を連ねたものではない。また再三にわたって修理が行なわれ、水路も改変されている。また水道の部分の地表面は二の丸の表面よ

り幾分高めであるから、故障があればただちに水道を掘り返せるようになっていたものである。水道の秘密を守るために、工事責任者の板屋平四郎が規定によって処刑されたというのは、たんなるお城にまつわる虚構の秘話にしかすぎないといえる。

二の丸の原地形は、御台所が卯辰山層そのものの上に礎石が据えられているから、この付近がもっとも高く、西方および北方に傾斜していた。寛永8年の



(山森專吉氏所蔵)

27. 二の丸御殿（文化5～明治14）

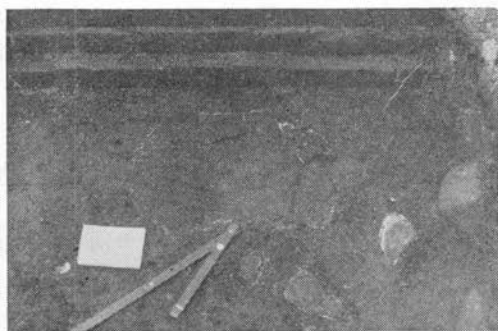
地業によって、この部分が削られ、西と北とに地盛りがなされたのである。南方の現在の道路の部分も低地になっており、この谷底を辰巳用水が走っていたのである。水道北部はやや高く、さらに濠の部分で急傾斜していた。

(8 塩! 東南壁)



28. 用水路東壁断面図

ところでこの二の丸は、加越能三カ国の太守前田家の居館のあったところである。主殿は建坪約2千坪(6,600平方m)玄関・広式・台所・居間のほか、能舞台も2つあり、一段さがって西の方には大奥があった。廃藩置県の際、鎮台分営がここに置かれ、さらに第九師団司令部と旅団司令部が建てられていた。



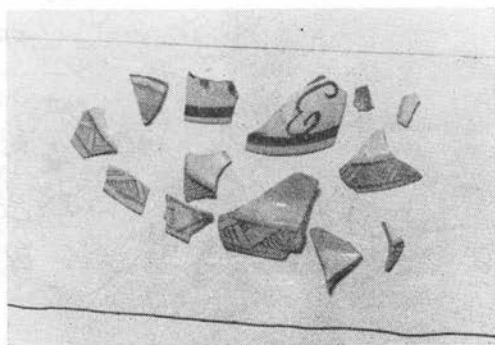
29. 二の丸台所の礎石

しかし約30cm掘り下げると、江戸中期の建造物の雄大な礎石が、絵図の示すとおりに顔を出し、1間または半間おきにつながっている。軍隊の建物はこの礎石をよけて構築されている。帝国陸軍も百万石の礎石を掘り起して司令部をつくるにはいたらなかったであろう。

加賀宝生の本拠である能舞台は、一つは法文学部校舎建築の際にくずされてしまったが、旧旅団司令部付近の奥能舞台は、拝見所の礎石と白洲がはっきり遺っており、建物のはずれには、中庭から中庭へとつづく泉水の水道が、赤戸室石の樋で示されている。

城主だけしか通れなかった大奥への大階段はすでにないが、居間から奥の庭園に通ずる石段は健在である。出土品は掃除がゆきとどいていたためか、意外に少なく、文化5年の火災で焼けた什器類の破片が見られるていどである。

ここで注目されるのは、本丸の焼跡にはなかった赤絵の磁器片が出土していることであって、緑色の顔料が火災のために融けて小石に付着しているものもある。化政文化の華やかさが、ようやく金沢城にも押寄せてきたのであろう。

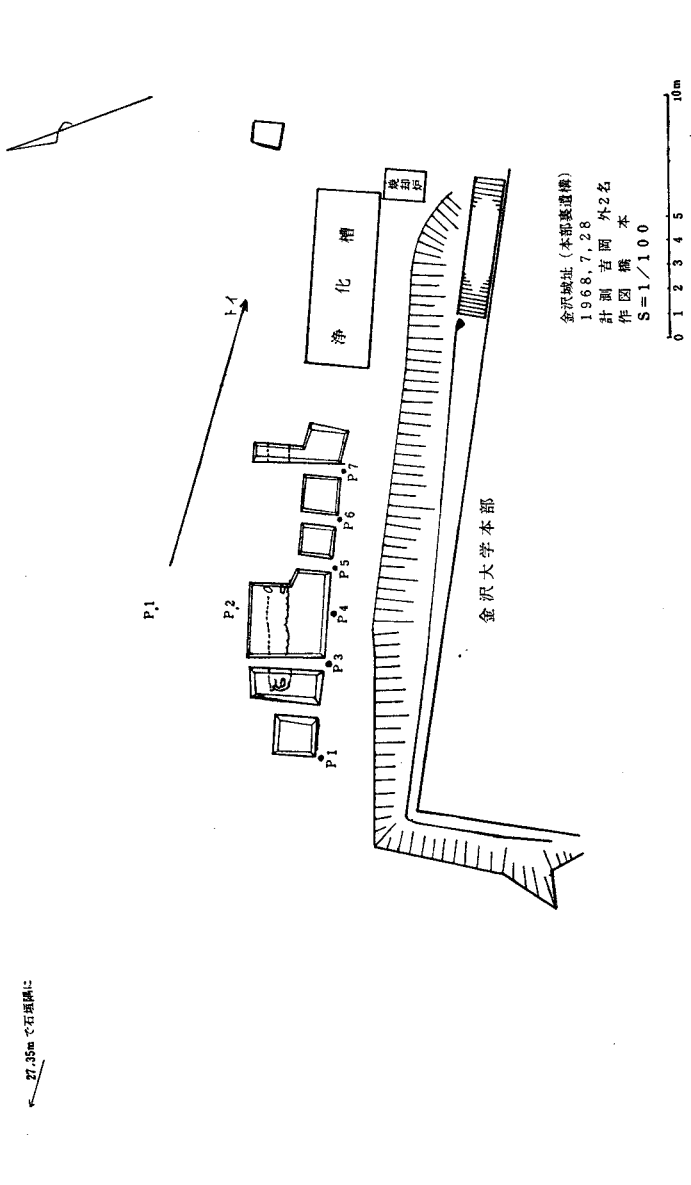


30. 赤絵の磁器片

九州産の染付に、九谷の赤を塗布したものも多く見出される。ただ古九谷も新九谷も全城内を通じて発見されないのは、いささか奇異に思われるが、本来それは日用品ではなく、贈答用の高級品であり、発見されないのが当たりまえというべきかも知れない。

5 九十間長屋と慶長古図

金沢城は本丸・東丸・二の丸・三の丸の各曲輪の縁辺に長屋が建てられていた。平時は武器武器の倉庫に使用し、有事の際は防禦施設とする予定であった。その本来の長さによって、三十間長屋・四十間長屋・五十間長屋・九十間長屋などと呼ばれている。金沢大学本部裏手の空地は、かつての九十間長屋（実際は二十八間）であるので、これを現存する本丸付段の三十間長屋（重要文化財）と比較して見る必要がある。またその下には、前田利家入城当時、長九郎左衛門・三輪志摩・横山山城の三家老の屋敷があることを慶長古図によって推察されるので、いわゆる慶長古図の史料的价值を再吟味するため、さらに御坊時代ここに七里三河法橋の居館があったという伝説を確かめるために、この



31. 三の丸発掘要図

地点を発掘して見ることにした。

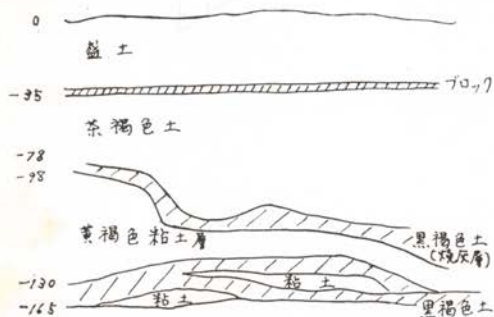
まず例によって、近い時代の遺構を確かめつつ古い時期にさかのぼるという手法をとって、金沢大学および歩兵第七連隊の盛った表土を除去すると、一面に瓦溜であって、軍隊は城を壊したあとの古瓦の処置を、かような形で行なった上で盛土をしたことが知られる。この瓦のなかにはかなり古いものも混じっているので、何回かの三の丸の火災の焼跡整理と新築のため、地下遺構はかなり攪拌されているということがいえる。

この古瓦を除くと間もなく石垣が現われてきた。もちろん九十間長屋台である。これは写真のように自然石を積んで土どめをしたもの



32. 九十間長屋台の石垣

ので、ほかの長屋台が巨石を切って石垣を築いているのと比べて、かなり簡素なものといわねばならない。これは三十間長屋や五十間長屋が城の縁辺にあり、初期から石積みされていたのに対し、この長屋の築造されたときは、城地は新丸（理学部・教養部）に拡大されており、泰平ムードの最中でもあるので、防壁用としての長屋台を構築する必要もなかったためと考えられる。



33. 三の丸トレンチ北側の壁面

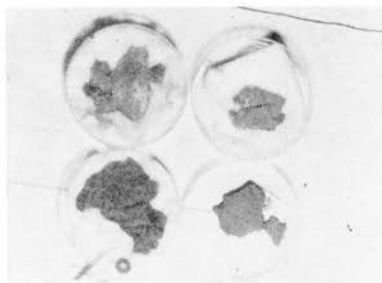
この石垣の下に厚さ5 cm くらいの焼土層が延びている。ここからは近世初頭のものと思われる丸瓦と甍片が得られた。甍の破片は越前焼と見られ、天正7年に陥落した新潟県直江津市の上杉氏御館からおたて出土したものや、天正9年に陥落した石川県鳥越村別宮城（佐久間玄蕃の前進拠点）の本



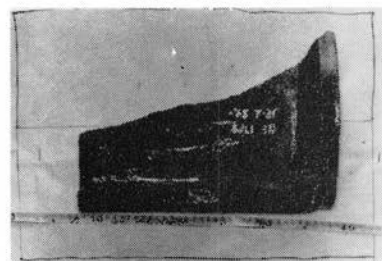
甕 片 (本丸)



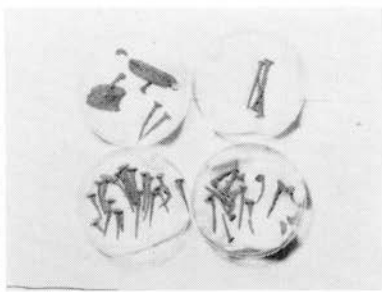
丸 瓦 (三の丸)



銅片と鉛片 (本丸)



平 軒 瓦 (本丸)

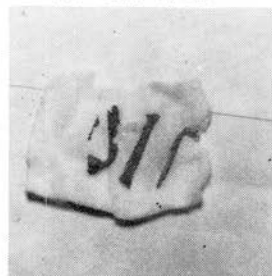


銅 釘 (本丸)

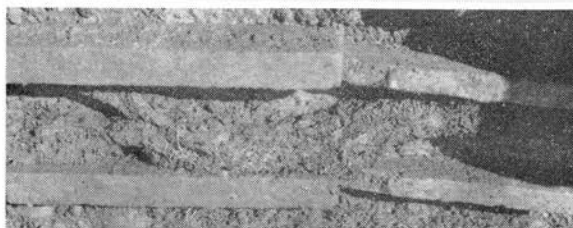


燈 明 皿 (本丸)

(下) 煙管 (本丸)



(右) 硯石 (本丸)



辰巳用水の石樋

丸跡より出たものと酷似している。従ってこの焼土層はかの慶長7年の猛火の所産と見ることができ、その火災は金沢全城を蔽う大火であったことが知られる。

しかも慶長古図は原本がなく、藩政期から写しが幾通りか作製され伝来したものであって、その史料価値には疑問の点も少なくないわけであるが、近世初頭にここにかんりの建造物があったと考えることはできる。その主要部分は金沢大学本部の建築で崩れてしまったために確認できないし、発掘面積も狭小であるので、慶長古図の確認については後日を待たねばならないが、九十間長屋が、桃山期のある建造物の焼跡に建てられたことは明らかである。

この焼土層の下20cmないし60cmの厚さで、赤土があり、その下に場所によって異なるが20cmから40cmくらいの黒色土層つまり俗に黒ボコと呼ばれる層があり、そのまた下に卯辰山層の砂礫層が存在している。

そこで中世の三の丸の地形を考えて見ると、ここはまさしく御山であって、傾斜地をなしていた。そこには草はもちろん灌木も生い茂り、これが黒ボコとなったと考えられる。事実黒ボコの中からは、なかば炭化した植物がかなり検出された。そしてここに拠点を構えた人物、おそらくは前田利家のときに、傾斜地をならして、低いところに客土したもので、さきの赤土層がこれであろう。

黒ボコと赤土層との境界線がきわめてシャープであるのは、短時日の土地造成によるもので、長期の堆積によるものではないことを示している。

慶長火災で焼け落ちた建造物は、本丸の建造物と同じ瓦を用い、同様な水甕を使用していたもので、いまだ辰巳用水は完工していなかったから、本丸と同様に大きな甕が必要であったのであろう。

しかも青磁や天目茶碗(瀬戸)が出土していることは、かなりの武家が居住していたことを考えさせるものである。慶長古図に三家老の屋敷跡とするのもあながちに否定すべきものとは思われない。

む す び

以上のような発掘の過程で考えられることは、城の発掘はたんに軍事史的ないし建築史的興味を満足させるだけのものではないということである。

城は数百人が数百年間生活してきた場所であり、陶磁器だけを見ても、金沢

城の地下は日本各地の窯業地出品の博覧会が開催されているようなものである。藩主や藩士たちの喜怒哀楽がそのままそこに表現されているといえそうである。

なお出土品についての考察は、遺物自体が目下整理中でもあり、紙幅の都合もあって割愛することとした。追って昭和44年度以降も発掘は継続されるはずであり、整理完了の際にまとめる予定で、ここでは一部の写真をもって報告に代えた次第である。